わたしたちに
できること

クリキンディ

● 発行：香川県青年海外協力協会 ● 発行日：平成 24 年 11 月 11 日（日） ●No.009

徳島サマーキャンプin上勝
『福島県高校生17人の熱い夏！』

報告：田村美津子
（21年度3次隊/マラウイ／幼児教育）

徳島サマーキャンプは、昨年起きた東日本大震災の復興支援の一環として、徳島県上勝町出身・在住の溝上 OB（昭和 63 年度 1 次隊/ガーナ/理数科教師）の呼びかけのもと、協力隊 OB や地元住民との交流により子どもたちの視野を広め将来について考える機会とすることを目的に開催されました。

福島県の高校生17名（男子5・女子12名）を徳島県上勝町に迎えて行われた4泊5日のキャンプ。最初は緊張気味で言葉も少なかった高校生たちでしたが、徳島の豊かな自然と JICA スタッフや OB・OG、地域のみなさんの温かい歓迎ムードの中、少しずつ打ち解け、最終日には自分のことや思い・将来の夢など、伸び伸びと語ってくれるほどになりました。高校生たちは、国際理解や地域交流・自然体験などの様々なプログラムを体験しました。4泊5日という短い期間でしたが、熱い講師陣の内容の濃いプログラムを体験しました。

【1日目】

朝、福島を出発し、午後には徳島市の阿波踊り会館で阿波踊りを体験後、夕方上勝町「自然の宿あさひ」に到着しました。食事は全てこのキャンプの「シェフ」溝上 OB（63-1/ガーナ/理数科教師）の元、OB・OG が調理し、おいしい上勝の食事で体も健康になった高校生たちでした。

【2日目】

午前中は協力隊 OB の体験談を聞きました。「やけに親しく距離感の近いこの人たち、協力隊ってなんだろう？」という感じから、尊敬と信頼の眼差しに変わりました。「自分がもし協力隊に参加したら」というテーマの発表では、ひとりひとり発表する姿に、思いやりの心やチャレンジしてみたい・学びたいという真摯で熱い思いが伝わってきました。午後は緑の稲穂が揺れる美しい棚田の散策、地元上勝中学校の生徒も参加し、交流を図りました。福島の子ども達は年下の中学生に対し優しく接し、すぐ仲良くなっていました。

また、この日の午後からは徳島以外の3県の OB・OG が続々と到着。毎年恒例の四国ブロック会議として、夕食のバーベキュー大会（もちろんノンアルコールですよ！）から合流しました。夕食後は近くにある宿泊先の旅館に移動し、各自持ち寄ったお酒などなどを楽しみながら語り明かしました。（中には語りすぎて「やかましい！」とお叱りを受けてしまった人もいたとか・・・？）

【3日目】

徳島の NGO「TICO」のザンビア支援に関するお話を聞き、アフリカの発展途上国の現状と支援活動の話を聞きました。午後は宿舎横にある川へ行き、水辺の生き物観察を行いました。澄んだ冷たい水に足を浸し、小さな生き物を見つけては歓声を上げていました。一番楽しかったプログラムのようでした。

【4日目】

上勝町が取り組んでいるゴミ分別の取り組みについてお話を聞き、実際に現場を見学させてもらいました。上勝町のゴミの分別はなんと、34種類！そこに至るまでにはゴミに関する多くの問題があったことや、そこから町民のみなさんの理解と協力があって現在のシステムができたということを聞き、「ピンチがチャンス！」「継続あるのみ！」をいうことを学びました。午後は、山に向かって叫ぶ、上勝名物？「ヤッホー！とホラ吹き」を体験しました。「好き・好き・好きー！」などと叫ぶ福島・徳島の子ども達と元隊員たち。みんなでやると恥ずかしさもどこへやら、絶景へ向けてみんなの声が木霊していきました。毎晩就寝前に行う一日のまとめの時間が終わってから、子ども達と隊員の語り合う時間がどんどん長くなっていき、ちらほら睡眠不足の子もみられました。

【最終日】

早朝、OG・OB・地域の人々に見送られながら上勝を出発した高校生たち。鳴門渦の道を見学し、夜には無事福島県に到着したそうです。福島から子どもたちを引率していただいた橋本千賀子さん・佐藤知史さんを始め、発起人である徳島 OB の溝上均さんや香川の OG 渡辺香里さんらを中心に、多くの四国 OB・OG のみなさんが入れ替わり立ち代り、可能なタイミングでキャンプに参加し、子供たちと一緒に楽しみながら活動をサポートしていた姿が印象的でした。反省会では「継続して行うべき事業ではないか」など多くの意見がでました。ぜひ今後も活動を継続し、交流を深め、互いに学び合い、子どもたちの豊かな人生の一役を少しでも担えたら素敵だと思います。いい出会い・学びに巡り逢えた4泊5日でした。

Events イベント開催！

■映画「幸せの経済学」無料上映会＆JICA ボランティア OV によるハッピートーク

◇11 月 11 日（日）17:30～20:00　@ソレイユ２

あなたは「豊かさ」をどんなものさしではかりますか？いわゆる‘途上国’での生活を経験した私たちだからこそ語れる「幸せ」とは？映画でそのヒントを得、またボランティア OV だからこそ語れる、それぞれの「幸せ」についてのトークです！

※映画「幸せの経済学」詳細 http://www.shiawaseno.net/

■四国出身者による帰国報告会

◇11 月 12 日（月）10:00～18:00

@イベントホール・ソレイユ

9 月末から 10 月頭にかけて帰国したばかりの四国出身者 12 名による帰国報告会。

▼11/12（日）スケジュール

	JV/SV	氏名	表敬県	隊次	派遣国	職種
10：00-10：30	SV	曽我部　清	香川	214	カンボジア	PCインストラクター
10：30-11：00	SV	保井　正明	香川	222	ドミニカ共和国	品質管理
11：00-11：30	JV	松下　倫尚	香川	221	ヨルダン	環境教育
11：30-12：00	JV	姫田　哲平	香川	222	フィジー	村落開発普及員
お昼休憩						
13：30-14：00	SV	上田　静雄	徳島	222	ベトナム	経営管理
14：00-14：30	SV	松木　昭二	愛媛	222	メキシコ	経営管理
14：30-15：00	SV	岡部　麻美	愛媛	222	エクアドル	渉外促進
15：00-15：30	JV	山内　万裕美	愛媛	222	モルディブ	看護師
15：30-16：00	JV	中嶋　真由美	愛媛	222	セントビンセント	体育
16：00-16：30	JV	木村　圭吾	愛媛	222	ベネズエラ	青少年活動
16：30-17：00	SV	片山　正敏	香川	222	パラグアイ	廃棄物処理
17：00-17：30	SV	三野　正二郎	香川	222	ケニア	柔道

愛染寺とパラグアイ（その2）

ＪＩＣＡ四国支部長　長澤一秀

3回シリーズで投稿を予定しており、今回は2回目である。前回は南米のパラダイス・パラグアイと題して、日本人移住者の第一号が香川県小豆島出身者で、日本人移住者が苦労しながら、パラグアイの経済発展を支えていることを書いた。今回はその続きである。

第2回：移住者支援プロジェクト

香川県から初めてパラグアイに移住したことを契機として、現在でもなおパラグアイと香川県では支援と交流を継続している。この支援をJICAでサポートする観点から、JICA四国と香川県は2010年から3年間の草の根技術事業を実施している。農産物の利用と活用にかかるプロジェクトである。

パラグアイの香川県からの移住地であるラ・コルメナ市では、ブドウ、トマトは生では食べるが、余分なものは大量に破棄するものが多いのが現実である。そこで、ブドウ、トマトをジュース、ピューレに加工することにより、原料の有効活用が図られ、かつ、市や加工生産者の所得向上に貢献するプロジェクトが提案された。

提案者平井さんと担当者石濱さん

平井さんは約50年前に、トヨタの自動車整備士として南米にわたり、最終的にパラグアイ・アスンシオンにたどりつき、パラグアイ香川県人会会長の職を務めている。50年間にわたる苦労を色々と話してくれた。それだけに故郷香川に対する愛郷の念も人一倍強い。

平井さんから、ラ・コルメナ市の農産物利活用のプロジェクトが香川県に提案され、当時国際課に在籍していた石濱さんが担当として、香川県の持つノウハウをラ・コルメナ市での農産物加工の草の根技協を立ち上げている。その後本人は、香川県からの現職派遣の青年海外協力隊員としてパラグアイに赴任し、ラ・コルメナ市を管轄するパラグアリ県庁観光部に村落開発普及員として派遣されている。本プロジェクトを色々な形で現地でサポートしている。詳しくは、HPを参照していただきたい。

http://www.pref.kagawa.jp/kokusai/k_kusanone/2011/index.html#letterofishihamakatsura

草の根技術協力

草の根技術協力は、香川県からの県農政部、JA並びにテーブルマークからの専門家派遣とラ・コルメナ市からの研修員受け入れ事業の組み合わせにより実施している。

専門家派遣の際には、現地で加工実習と共に、地域振興の考え方、マーケティング、衛生管理などに関するセミナーを実施した。

現在、食品加工場の機材調達を進めており、本格的に製品が出来、マーケットに出るのもあと数か月という段階に来ている。

うどん県かがわのアピール

現地に専門家として派遣された場合には、香川県人として、必須の技術を披露しなければならない。うどん打ちである。現地にある材料でうどんを作るには、大変な苦労がある。一番大変なのはだしを取る「いりこ」が簡単に手に入らないことである。その際はカツオでとるしかない。

うどんはどこで食べても、手打ちは美味しい。久しぶりに香川県に帰ってきたようだと、香川から移住した香川県人会の皆さんは大満足であった。

この草の根技術協力事業は、パラグアイへ移住して75年、2世・3世も育ちつつあるという現状であるが、パラグアイに住む香川県人会の人たちの発展のために、また、香川とパラグアイの友好親善のために、真に役立っていると改めて感じた次第である。

（次号へつづく）

東北再訪記

渡辺香里（平成 15 年１次隊/ヨルダン/音楽）

2012 年 7 月、東日本大震災から 1 年 4 か月が過ぎ、日本国内での復興支援ムードも落ち着きを取り戻したといえば語弊があるだろうか。特にここ香川県では、あれほどの大きな地震でも揺れが感じられなかったことから、すでに「過去の事」として感じている人も少なくないように思う。目に見える瓦礫が行き場のない場所に集められ、遠いところから見ると、復興したかのような感覚に陥ってしまう。被災地は本当に復興しているのか、被災者がいま抱える問題は何なのか知るべく、東北を再訪問した。

宮城県石巻市渡波

宮城県石巻市渡波小学校、昨年炊き出しに行った場所の一つ。すでに避難所としての役目を終え、その校舎は立て直しの工事を待つ間、ひっそりと静まり返っていた。誰もいない校庭にたたずむと、寒い体育館でたくさんの人が生活していたこと、日本各地から入ったボランティアたちを懐かしく思う。学校を去る時、体育館や教室のベランダからみんなが顔を出し、大声で「ありがとう！」と手を振ってくれ、それに対し私は「必ず戻ってきますから」と叫んだことを思い出した。あの人たちは今どこでどんな生活を送っているんだろう。

▼渡波小学校

▼奥に見えるのが渡波仮設校舎

渡波小学校に通う子どもたちは、近隣の学校の校庭に仮設校舎を建て、バス通学をしているらしい。もともと幼稚園から中学校までが同じ敷地内にあったその運動場に、渡波小・中が仮設校舎を建てたので、現在は同じ敷地内に5つの学校が併設している状態。渡波の子たちは、「間借りさせてもらってる」という負い目を感じ、もともといた子たちは「狭いな」と感じる。校舎は涼しいのに、仮設は暑い。1つしかない体育館で、一日に何度も行われる卒業式。そんな中でイザコザが起こらないはずもないよね。誰の責任でもないのに、通常ではない生活に皆が我慢を感じ、ストレスとなり爆発する。こんな小さな学校で起きていること、同じような問題がたくさんの場所で起きているんじゃないかな。

宮城県気仙沼市

気仙沼市の嘱託看護師として働いていた香川出身の協力隊OG宮治直子ちゃん（H21-1/パラグアイ/保健師）を訪ねた。任国で震災を知った彼女が、帰国後なぜ気仙沼で働くようになり、どんな思いで仕事をしているのかを聞いてみたかった。

▲宮治さんと久々の再会

彼女は看護師として、市内の仮設住宅を巡回し、住民の健康相談を行っていた。無理を言って仕事に同行させてもらったが、仮設住宅一つとっても支援の入り方やコミュティ形成などにおいて、問題はたくさんあるなぁと感じた。

これまで縁もゆかりもなかった気仙沼市に住み、「被災地」で自分ができることに悩み、疑問を抱きながら気仙沼のために一生懸命働いている直子ちゃんを尊敬してやまない。

私にも何かできることはないかと訪れた一軒の職業紹介所。香川から来たこと、地元の皆さんのご迷惑にならない程度に何かお手伝いできることはないかと尋ねたところ、返ってきた返事は「仕事はたくさんあります」という回答だった。被災者の就労場所がないんだと思い込んでいた私には驚きの事実。その方がおっしゃられていたのは、震災後、人々の生活は変わった、ということ。失った物の多さ、一瞬にして変わってしまった生活環境はもちろん、次から次へと入る支援の手。どうなれば復興したと言えるのか、誰が言うことが正しいのか、私たち自身はどうなりたいのか？めまぐるしく移りゆく動きに、ついていくことすらままならない状況だと。

▼ハローワーク@気仙沼

気仙沼市のボランティアセンターで、現在募集中のボランティアがあるのか尋ねたところ、週末に団体のみ予約で受け付けているとのこと。予約なしでは仕事もできないボランティア。仕事がないということはいい方向にとらえていいのかな？やっぱり急に行って、1 日だけ何かをしようなんて、その調整業務や手間を考えると、迷惑にしかならないのかもしれない。誰のためのボランティア活動なんだろうと、気持ちは切なくなるばかりだった。

宮城県気仙沼市大島

そんな思いで再訪した気仙沼大島。島の住民で結成された‘おばか隊’は事実上解散し、災害対策本部もボランティア受け入れなどの役目を終え、今は震災後にできた縁を頼りに個人的にボランティアに入っている人たちがほとんどだそう。1 年ぶりの懐かしい顔ぶれとお酒を飲んで笑って過ごせる時間。これでいいのかな？と思ったり、これでいいんだな、と思ったり。

▼気仙沼名物「ほや」

海沿いを車で北上する中で見えたものは、このリアス式海岸を襲った津波の傷跡。海面と同じ高さにある場所には何もなく、小高くなっている場所には建物が残っていて、よくよく見てみるとさら地に家の基礎だけが並んでいる。供えられた花と力強く生える草が、あの日起きたこと、そしてこの場所に人の暮らす家があったということを悲しく思い出させた。そこに家を建て直せない人の悲しみ、また残った家からそれを見続ける人の痛み、どちらも忘れることなんて出来ない。この現実と寄り添いながら進まなければならない。

▼基礎だけが残る家屋の跡

宮城県釜石市大平

そして最終目的地の釜石へ。半年前に香川に来てくれた先生たちと懐かしの再会を果たすことが出来た。香川での思い出話に花を咲かせながらも、震災当時のことも話してくれた先生。いま私がいるこの場所に、水が溢れ、ほとんどの建物や車が流されたあの日のこと、翌日からご両親を探すために何キロも歩いたこと、それからずっと続いた避難所生活のこと。色んな思いに涙が止まらず、私は貴重なお話が伺えたことに感謝すると共に、心から一生消えることのないこの痛みを少しでも分かり合える関係を作りたいと、安易な気持ちではなく、そう思った。

▼釜石市立大平中学校

私が大平中学校を訪れたその日は、生徒全員でやっているボランティア活動の日だった。生徒たちはいくつかのチームに分かれ、仮設住宅を訪問し、そこで合唱や大平ソーランなどを披露、またお年寄りの御用聞きなど、人との触れ合いをとても貴重とした住民の皆さんに元気を与える活動を続けていた。

▼大平ソーラン

大平中学校はちょうど高台にあったから津波の被害を免れた、ということが行って見るとよく分かる。今では近くにたくさんの仮設住宅があり、それぞれの仮設住宅は、建設された時期や業者も異なり、場所はもちろん、中の設備などの違いも様々だそう。どんなのでもいいから入りたいと皆が思っていた時とは変わり、「あっちの方がいい。」と思う今。いい所は人気があり、仮設住宅から仮設住宅へのお引越しもあるそうだ。

人間だから、どんなに満たされても欲が出てくるのは当然で、だからそれぞれに対応したケアが必要なんだということは分かるけど、色んな話を聞いていると本当に小さな問題が山積みで、何から手をつけていいのか分からない、というよりも私が簡単に手をつけられることではないんだと思った。

あの時から、すでにキレイ事だけではなくなっている現実が、たまにしか訪れない私にも目に見えて感じた。でもそんな事は震災や被災に関わらず、人として誰もが持つ事実で何が悪いとか良いとか私が言うことではない。ただ、震災という自分ではどうしようもない突然の出来事から立ち直り進んでいる人たちに、たくさんの人が手を差し伸べている中、同じことをやっても、やる人、受け取る人、環境など様々な状態によって、その成果なんて図りきれないだろう。私には、「支援」なんて大げさなことは出来ないと情けなく思うが、せめて皆さんの邪魔にならないよう「寄り添って」いたいと思う。

▲釜石の老人施設にて

私たちにできること

来年もやります！「さぬき冬の修学旅行」

2013 年 1 月 11 日（金）～14 日（月・祝）の 3 泊 4 日
13（日）はまんのうリレーマラソン大会に出場予定！

前回開催時は、「元気になって欲しい」と香川に呼んだ子どもたちから、逆にたくさんの元気と感動をもらった私たち。
奇跡的につながったこの縁を大切に、楽しみつつ、あたたかい香川にみんなで迎えましょう！たくさんの OB・OG のみなさんの参加・ご協力をお待ちしています。

★関連記事：今年実施した呼び寄せ企画の様子です
【青年海外協力隊 OB による東北の子どもたち呼び寄せ－冬のさぬき修学旅行－】
http://www.jica.go.jp/shikoku/topics/2011/120125.html

編集後記

8 月に開催された上勝町での四国ブロック交流会、本当に美しい自然の中で、福島の子どもたちも私たち大人も、のびのびと充実した時間過ごすことができました。子どもたちの引率で来県した佐藤さんは、私と任期の重なっていたモンゴル隊員 OB です。意外なところで再会を果たすことができ、嬉しかったです。来年はいよいよ香川での開催！8 月には候補地小豆島への下見も終えました。今年のように良い会となるよう準備したいですね。（20-4 高橋梓）
★発行にあたり執筆・編集にご協力いただいたみなさま、ありがとうございました！次号もどうぞお楽しみに！

発行日：平成 24 年 11 月11日　発行元：香川県青年海外協力協会　会長　高橋和寛　ホームページ：http://www.shikoku.ac.jp/~jocakgw/